
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 午《ひる》過ぎだつた

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 上野|界限《かいわい》

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数)
(例) [# 「ㄅ」、第3水準1-14-76]々《そうそう》

明治元年五月十四日の午《ひる》過ぎだつた。「官軍は明日夜の明け次第、東叡山彰義隊を攻撃する。上野|界限《かいわい》の町家のものは [# 「ㄅ」、第3水準1-14-76]々《そうそう》何処《どこ》へでも立ち退《の》いてしまへ。」さう云ふ達しのあつた午過ぎだつた。下谷町《したやまち》二丁目の小間物店、古河屋政兵衛《こがやせいべゑ》の立ち退いた跡には、台所の隅の蛇貝《あはびがひ》の前に大きい牡の三毛猫が一匹静かに香箱《かうばこ》をつくつてゐた。

戸をしめ切つた家の中は勿論午過ぎでもまつ暗だつた。人音《ひとおと》も全然聞えなかつた。唯耳にはひるものは連日の雨の音ばかりだつた。雨は見えない屋根の上へ時々急に降り注いで、何時《いつ》か又中空へ遠のいて行つた。猫はその音の高まる度に、琥珀《こはく》色の眼をまん円《まる》にした。竈《かまど》さへわからない台所にも、この時だけは無気味な燐光が見えた。が、ざあつと云ふ雨音以外に何も変化のない事を知ると、猫はやはり身動きもせずもう一度眼を糸のやうにした。

そんな事が何度か繰り返される内に、猫はとうとう眠つたのか、眼を明ける事もしなくなつた。しかし雨は不変《あひかはらず》急になつたり静まつたりした。八つ、八つ半、時はこの雨音の中にだんだん日の暮へ移つて行つた。

すると七つに迫つた時、猫は何かに驚いたやうに突然眼を大きくした。同時に耳も立てたらしかつた。が、雨は今までよりも遙かに小降りになつてゐた。往来を馳《は》せ過ぎる駕籠舁《かごかき》の聲、その外には何も聞えなかつた。しかし数秒の沈黙の後、まつ暗だつた台所は何時の間にかぼんやり明るみ始めた。狭い板の間を塞《ふさ》いだ竈、蓋《ふた》のない水瓶《みづがめ》の水光り、荒神《くわうじん》の松、引き窓の綱、

そんな物も順々に見えるやうになつた。猫は愈《いよいよ》不安さうに、戸の明いた水口《みづぐち》を睨《にら》みながら、のそりと大きい体を起した。

この時この水口の戸を開いたのは、いや戸を開いたばかりではない、腰障子もしまひに明けたのは、濡れ鼠になつた乞食だつた。彼は古い手拭をかぶつた首だけ前へ伸ばしたなり、少時《しばらく》は静かな家のけはひにぞつと耳を澄ませてゐた。が、人音のないのを見定めると、これだけは真新しい酒筵《さかむしろ》に鮮かな濡れ色を見せた儘、そつと台所へ上つて来た。猫は耳を平《ひら》めながら、二足三足跡ずさりをした。しかし乞食は驚きもせず後手《うしろで》に障子をしめてから、徐《おもむ》ろに顔の手拭をとつた。顔は髭《ひげ》に埋まつた上、膏藥も二三個所貼つてあつた。しかし垢《あか》にはまみれてゐても、眼鼻立ちは寧《むし》ろ尋常だつた。

「三毛。三毛。」

乞食は髪の水を切つたり、顔の滴《しづく》を拭つたりしながら、小聲に猫の名前を呼んだ。猫はその声に聞き覚えがあるのか、平めてゐた耳をもとに戻した。が、まだ其処《そこ》に佇《たたず》んだなり、時々はじろじろ彼の顔へ疑深い眼を注いでゐた。その間に酒筵を脱いだ乞食は脛《すね》の色も見えない泥足の儘、猫の前へどつかりあぐらをかいた。

「三毛公。どうした？ 誰もゐない所を見ると、貴様だけ置き去りを食はされたな。」

乞食は独り笑ひながら、大きい手に猫の頭を撫でた。猫はちよいと逃げ腰になつた。が、それぎり飛び退《の》きもせず、反《かへ》つて其処へ坐つたなり、だんだん眼さへ細め出した。乞食は猫を撫でやめると、今度は古|湯帷子《ゆかた》の懷から、油光りのする短銃を出した。さうして覺束《おぼつか》ない薄明りの中に、引き金の具合を検《しら》べ出した。「いくさ」の空気の漂つた、人気のない家の台所に短銃をいぢつてゐる一人

の乞食 それは確に小説じみた、物珍らしい光景に違ひなかつた。しかし薄眼になつた猫はやはり背中を円《まる》くした儘、一切の秘密を知つてゐるやうに、冷然と坐つてゐるばかりだつた。

「明日になるとな、三毛公、この界限《かいわい》へも雨のやうに鉄砲の玉が降つて来るぞ。そいつに中《あた》ると死んじまふから、明日はどんな騒ぎがあつても、一日縁の下に隠れてゐるよ。……」

乞食は短銃を懐《しら》べながら、時々猫に話しかけた。

「お前とも永い御馴染《おなじみ》だな。が、今日が御別れだぞ。明日はお前にも大厄日だ。おれも明日は死ぬかも知れない。よし又死なずにすんだ所が、この先二度とお前と一しよに掃溜《はきだ》めあさはしないつもりだ。さうすればお前は大喜びだらう。」

その内に雨は又一しきり、騒がしい音を立て始めた。雲も棟瓦《むねがはら》を煙らせる程、近々に屋根に押し迫つたのであらう。台所に漂つた薄明りは、前よりも一層かすかになつた。が、乞食は顔も挙げず、やつと懐べ終つた短銃へ、丹念に弾薬を装填《さうてん》してゐた。

「それとも名残りだけは惜しんでくれるか？ いや、猫と云ふやつは三年の恩も忘れると云ふから、お前も当てにはならなさうだな。が、まあ、そんな事はどうでも好《い》いや。唯おれもゐないとすると、」

乞食は急に口を噤《つぐ》んだ。途端に誰か水口の外へ歩み寄つたらしいけはひがした。短銃をしまふのと振り返ると、乞食にはそれが同時だつた。いや、その外に水口の障子《がらり》と明けられたのも同時だつた。乞食は咄嗟《とつさ》に身構へながら、まともに闖入者《ちんにふしや》と眼を合せた。

すると障子を明けた誰かは乞食の姿を見るが早いか、反つて不意を打たれたやうに、「あつ」とかすかな叫び声を洩らした。それは素裸足《すはだし》に大黒傘を下げた、まだ年の若い女だつた。彼女は殆ど衝動的に、もと来た雨の中へ飛び出さうとした。が、最初の驚きから、やつと勇気を恢復すると、台所の薄明りに透《す》かしながら、ちつと乞食の顔を覗《のぞ》きこんだ。

乞食は呆気《あつけ》にとられたのか、古|湯帷子《ゆかた》の片膝を立てた儘、まじまじ相手を見守つてゐた。もうその眼にもさつきのやうに、油断のない気色《けしき》は見えなかつた。二人は黙然《もくねん》と少時《しばらく》の間、互に眼と眼を見合せてゐた。

「何だい、お前は新公ぢやないか？」

彼女は少し落ち着いたやうに、かう乞食へ声をかけた。乞食はにやにや笑ひながら、二三次彼女へ頭を下げた。

「どうも相済みません。あんまり降りが強いもんだから、つい御留守へはひこみましたかね 何、格別明き巢狙ひに宗旨を変へた訣《わけ》でもないんです。」

「驚かせるよ、ほんたうに いくら明き巢狙ひぢやないと云つたつて、図々しいにも程があるぢやないか？」

彼女は傘の滴《しづく》を切り切り、腹立たしさうにつけ加へた。

「さあ、こつちへ出ておくれよ。わたしは家へはひるんだから。」

「へえ、出ます。出ると仰有《おつしや》らないでも出ますがね。姐《ねえ》さんはまだ立ち退《の》の》かなかつたんですかい？」

「立ち退いたのさ。立ち退いたんだけど、 そんな事はどうでも好いぢやないか？」

「すると何か忘れ物でもしたんですね。 まあ、こつちへおはひんなさい。其処では雨がかりますぜ。」

彼女はまだ業腹《ごふはら》さうに、乞食の言葉には返事もせず、水口の板の間へ腰を下した。それから流しへ泥足を伸ばすと、ざあざあ水をかけ始めた。平然とあぐらをかいた乞食は髭《ひげ》だらけの顴《あご》をさすりながら、じろじろその姿を眺めてゐた。彼女は色の浅黒い、鼻のあたりに雀斑《そばかす》のある、田舎者らしい小女だつた。なりも召使ひに相応な手織木綿の一重物に、小倉《こくら》の帯しかしてゐなかつた。が、活《い》き活きた眼鼻立ちや、堅肥りの体つきには、何処か新しい桃や梨を聯想させる美しさがあつた。

「この騒ぎの中を取りに返るのぢや、何か大事の物を忘れたんですね。何です、その忘れ物は？ え、姐《ねえ》さん。 お富さん。」

新公は又尋ね続けた。

「何だつて好《い》いぢやないか？ それよりさつさと出て行つておくれよ。」

お富の返事は突慥貪《つつけんどん》だつた。が、ふと何か思ひついたやうに、新公の顔を見上げると、真面目にこんな事を尋ね出した。

「新公、お前、家の三毛を知らないかい？」

「三毛？ 三毛は今|此処《ここ》に、 おや、何処《どこ》へ行きやがつたらう？」

乞食はあたりを見廻した。すると猫は何時の間にか、棚の揺鉢《すりばち》や鉄鍋の間に、ちゃんと香箱をつくつてゐた。その姿は新公と同時に、忽ちお富にも見つかつたのであらう。彼女は柄杓《ひしやく》を捨てるが早いか、乞食の存在も忘れたやうに、板の間の上に立ち上つた。さうして晴れ晴れと微笑しながら、棚の上の猫を呼ぶやうにした。

新公は薄暗い棚の上の猫から、不思議さうにお富へ眼を移した。

「猫ですかい、姐さん、忘れ物と云ふのは？」

「猫ぢや悪いのかい？ 三毛、三毛、さあ、下りて御出で。」

新公は突然笑ひ出した。その声は雨音の鳴り渡る中に殆《ほとんど》気味の悪い反響を起した。と、お富はもう一度、腹立たしさに頬を火照《ほて》らせながら、いきなり新公に怒鳴りつけた。

「何が可笑《をか》しんだい？ 家のお上《かみ》さんは三毛を忘れて来たつて、気違ひの様になつてゐるんぢやないか？ 三毛が殺されたらどうしようつて、泣き通しに泣いてゐるんぢやないか？ わたしもそれが可哀さうだから、雨の中をわざわざ帰つて来たんぢやないか？」

「ようござんすよ。もう笑ひはしませんよ。」

新公はそれでも笑ひ笑ひ、お富の言葉を遮《さへぎ》つた。

「もう笑ひはしませんがね。まあ、考へて御覧なさい。明日にも『いくさ』が始まらうと云ふのに、高が猫の一匹や二匹 これはどう考へたつて、可らしいのに違ひありませんや。お前さんの前だけれども、一体此処のお上さん位、わからずやのしみつたれはありませんぜ。第一あの三毛公を探しに、……」

「お黙りよ！ お上さんの讒訴《ざんそ》なぞは聞きたくないよ！」

お富は殆どぢだんだを踏んだ。が、乞食は思ひの外彼女の権幕には驚かなかつた。のみならずしげしげ彼女の姿に無遠慮な視線を注いでゐた。実際その時の彼女の姿は野蛮な美しさそのものだつた。雨に濡れた着物や湯巻、それらは何処《どこ》を眺めても、ぴつたり肌についてゐるだけ、露《あら》はに肉体を語つてゐた。しかも一目に処女を感じず、若々しい肉体を語つてゐた。新公は彼女に目を据ゑたなり、やはり笑ひ声に話し続けた。

「第一あの三毛公を探しに、お前さんをよこすのでもわかつてゐますあ。ねえ、さうぢやありませんか？ 今ぢやもう上野界限、立ち退《の》かない家はありませんや。して見れば町家は並んでゐても、人のゐない野原と同じ事だ。まさか狼も出まいけれども、どんな危い目に遇ふかも知れない と、まづ云つたものぢやありませんか？」

「そんな余計な心配をするより、さつさと猫をとつておくれよ。これが『いくさ』でも始まりやしまいし、何が危い事があるものかね。」

「冗談云つちやいけません。若い女の一人歩きが、かう云ふ時に危くなけりや、危いと云ふ事はありませんや。早い話が此処にゐるのは、お前さんとわたしと二人つきりだ。万一わたしが妙な氣でも出したら、姐《ねえ》さん、お前さんはどうしなさるね？」

新公はだんだん冗談だか、真面目だか、わからない口調になつた。しかし澄んだお富の目には、恐怖らしい影さへ見えなかつた。

唯その頬には、さつきよりも、一層血の色がさしたらしかつた。

「何だい、新公、お前はわたしを嚇《おど》かさうつて云ふのかい？」

お富は彼女自身嚇かすやうに、一足新公の側へ寄つた。

「嚇かすえ？ 嚇かすだけならば好いぢやありませんか？ 肩に金切《きんぎ》れなんぞくつけてゐたつて、風《ふう》の悪いやつらも多い世の中だ。ましてわたしは乞食ですぜ。嚇かすばかりとは限りませんや。もしほんたうに妙な氣を出したら、……」

新公は残らず云はない内に、したたか頭を打ちのめされた。お富は何時か彼の前に、大黒傘をふり上げてゐたのだつた。

「生意氣な事をお云ひでない。」

お富は又新公の頭へ、力一ぱい傘を打ち下した。新公は咄嗟《とつさ》に身を躲《かは》さうとした。が、傘はその途端に、古|湯帷子《ゆかた》の肩を打ち据ゑてゐた。この騒ぎに驚いた猫は、鉄鍋を一つ蹴落しながら、荒神《くわうじん》の棚へ飛び移つた。と同時に荒神の松や油光りのする燈明皿も、新公の上へ転げ落ちた。新公はやつと飛び起きる前に、まだ何度もお富の傘に、打ちのめされずにはすまなかつた。

「こん畜生！ こん畜生！」

お富は傘を揮《ふる》ひ続けた。が、新公は打たれながらも、とうとう傘を引つたくつた。のみならず傘を投げ出すが早いか猛然とお富に飛びかかつた。二人は狭い板の間の上に、少時《しばらく》の間|掴《つか》み合つた。この立ち廻りの最中に、雨は又台所の屋根へ、凄《すさ》まじい音を奏《あつ》め出した。光も雨音の高まるのと一しよに、見る見る薄暗さを加へて行つた。新公は打たれても、引つ搔かれても、遮二無二《しやにむに》お富を [# 「てへん+丑」、第4水準2-12-93] 《ね》ぢ伏せようとした。しかし何度か仕損じた後、やつと彼女に組み付いたと思ふと、突然又|弾《はじ》かれたやうに、水口の方へ飛びすさつた。

「この阿魔あ！……」

新公は障子を後ろにしたなり、ぢつとお富を睨《にら》みつけた。何時か髪も壊れたお富は、べつたり板の間に坐りながら、帯の間に挟んで来たらしい剃刀《かみそり》を逆手《さかて》に握つてゐた。それは殺氣を帯びてもゐれば、同時に又妙に艶《なま》めかしい、云はば荒神の棚の上に、背を高めた猫と似たものだつた。二人はちよいと無言の儘、相手の目の中を窺《うかが》ひ合つた。が、新公は一瞬の後、わざとらしい冷笑を見せると、懷《ふところ》からさつきの短銃を出した。

「さあ、いくらでもぢたばたして見ろ。」

短銃の先は徐《おもむ》ろに、お富の胸のあたりへ向つた。それでも彼女は口惜《くや》しさうに、新公の顔

を見つめたきり、何とも口を開かなかつた。新公は彼女が騒がないのを見ると、今度は何か思ひついたやうに、短銃の先を上に向けた。その先には薄暗い中に、琥珀《こはく》色の猫の目が仄《ほの》めいてゐた。

「好《い》いかい？ お富さん。」

新公は相手をじらすやうに、笑ひを含んだ声を出した。

「この短銃がどん〔#「どん」に傍点〕と云ふと、あの猫が逆様に転げ落ちるんだ。お前さんにしても同じ事だぜ。そら好いかい？」

引き金はすんでに落ちようとした。

「新公！」

突然お富は声を立てた。

「いけないよ。打つちやいけない。」

新公はお富へ目を移した。しかしまだ短銃の先は、三毛猫に狙ひを定めてゐた。

「いけないのは知れた事だ。」

「打つちや可哀さうだよ。三毛だけは助けておくれ。」

お富は今までとは打つて変つた、心配さうな目つきをしながら、心もち震へる唇《くちびる》の間に、細かい歯並みを覗かせてゐた。新公は半ば嘲《あざけ》るやうに、又半ば訝《いぶか》るやうに、彼女の顔を眺めたなり、やつと短銃の先を下げた。と同時にお富の顔には、ほつとした色が浮んで来た。

「ぢや猫は助けてやらう。その代り。」

新公は横柄《わうへい》に云ひ放つた。

「その代りお前さんの体を借りるぜ。」

お富はちよいと目を外《そ》らせた。一瞬間彼女の心の中には、憎しみ、怒り、嫌悪、悲哀、その外いろいろの感情がごつたに燃え立つて来たらしかつた。新公はさう云ふ彼女の変化に注意深い目を配りながら、横歩きに彼女の後ろへ廻ると茶の間の障子を明け放つた。茶の間は台所に比べれば、勿論一層薄暗かつた。が、立ち退いた跡と云ふ条、取り残した茶筆筥《ちやだんす》や長火鉢は、その中にもはつきり見る事が出来た。新公は其処に佇《たたず》んだ儘、かすかに汗ばんでゐるらしい、お富の襟もとへ目を落した。するとそれを感じたのか、お富は体を捻《ねぢ》るやうに、後ろにゐる新公の顔を見上げた。彼女の顔にはもう何時の間にか、さつきと少しも変わらない、活《い》き活きた色が返つてゐた。しかし新公は狼狽《らうばい》したやうに、妙な瞬《またた》きを一つしながら、いきなり又猫へ短銃を向けた。

「いけないよ。いけないつてば。」

お富は彼を止めると同時に、手の中の剃刀《かみそり》を板の間へ落した。

「いけなけりやあすこへお行きなさいな。」

新公は薄笑ひを浮べてゐた。

「いけ好かない！」

お富は忌々《いまいま》しさうに呟《つぶや》いた。が、突然立ち上ると、ふて腐れた女のするやうに、さつさと茶の間へはひつて行つた。新公は彼女の諦めの好いのに、多少驚いた容子《ようす》だつた。雨はもうその時には、ずつと音をかすめてゐた。おまけに雲の間には、夕日の光でもさし出したのか、薄暗かつた台所も、だんだん明るさを加へて行つた。新公はその中に佇みながら、茶の間のけはひに聞き入つてゐた。小倉の帯の解かれる音、畳の上へ寝たらしい音。それぎり茶の間はしんとしてしまつた。

新公はちよいとためらつた後、薄明るい茶の間へ足を入れた。茶の間のまん中にはお富が一人、袖に顔を蔽《おほ》つた儘、ぢつと仰向《あふむ》けに横たはつてゐた。新公はその姿を見るが早いのか、逃げるやうに台所へ引き返した。彼の顔には形容の出来ない、妙な表情が漲《みなぎ》つてゐた。それは嫌悪のやうにも見えれば、恥ぢたやうにも見える色だつた。彼は板の間へ出たと思ふと、まだ茶の間へ背を向けたなり、突然苦しさうに笑ひ出した。

「冗談だ。お富さん。冗談だよ。もうこつちへ出て来ておくんなさい。……」

何分かの後、懷《ふところ》に猫を入れたお富は、もう傘を片手にしながら、破《や》れ筵《むしろ》を敷いた新公と、気軽に何か話してゐた。

「姐《ねえ》さん。わたしは少しお前さんに、訊《き》きたい事があるんですがね。」

新公はまだ間が悪さうに、お富の顔を見ないやうにしてゐた。

「何をさ！」

「何をつて事もないんですがね。まあ肌身を任せると云へば、女の一生ぢや大変な事だ。それをお富さん、お前さんは、その猫の命と懸け替に、こいつはどうもお前さんにしちや、乱暴すぎるぢやありませんか？」

新公はちよいと口を噤《つぐ》んだ。がお富は頬笑んだぎり、懷の猫を劬《いたは》つてゐた。

「そんなにその猫が可愛いんですかい？」

「そりや三毛も可愛いしね。」

お富は煮え切らない返事をした。

「それとも又お前さんは、近所でも評判の主人思ひだ。三毛が殺されたとなつた日にや、この家の上《かみ》さ

んに申し訳がない。　と云ふ心配でもあつたんですかい？」
「ああ、三毛も可愛いしね。お上さんも大事にや違ひないんだよ。けれどもただわたしはね。」

お富は小首を傾けながら、遠い所でも見るやうな目をした。
「何と云へば好いんだらう？　唯あの時はああしないと、何だかすまない気がしたのさ。」
更に又何分かの後、一人になつた新公は、古 | 湯帷子《ゆかた》の膝を抱いた儘、ぼんやり台所に坐つてゐた。暮色は疎《まば》らな雨の音の中に、だんだん此処へも迫つて来た。引き窓の綱、流し元の水瓶《みづがめ》、　そんな物も一つづつ見えなくなつた。と思ふと上野の鐘が、一杵《いつしよ》づつ雨雲にこもりながら、重苦しい音を揚げ始めた。新公はその音に驚いたやうに、ひつそりしたあたりを見廻した。それから手さぐりに流し元へ下りると、柄杓《ひしやく》になみなみと水を酌《く》んだ。
「村上新三郎源の繁光、今日だけは一本やられたな。」
彼はさう呟きざま、うまさうに黄昏《たそがれ》の水を飲んだ。……

* * *

明治二十三年三月二十六日、お富は夫や三人の子供と、上野の広小路を歩いてゐた。
その日は丁度竹の台に、第三回内国博覧会の開会式が催される当日だつた。おまけに桜も黒門のあたりは、もう大抵開いてゐた。だから広小路の人通りは、殆ど押し返さないばかりだつた。其処へ上野の方からは、開会式の帰りらしい馬車や人力車の行列が、しつきりなしに流れて来た。前田 | 正名《まさな》、田口卯吉、渋沢栄一、辻新次、岡倉覚三、下条正雄　その馬車や人力車の客には、さう云ふ人々も交つてゐた。
五つになる次男を抱いた夫は、袂《たもと》に長男を縋《すが》らせた儘、目まぐるしい往来の人通りをよけよけ、時々ちよいと心配さうに、後ろのお富を振り返つた。お富は長女の手をひきながら、その度に晴れやかな微笑《ほほえみ》を見せた。勿論二十年の歳月は、彼女にも老《おい》を齎《もたら》してゐた。しかし目の中に冴えた光は昔と余り変らなかつた。彼女は明治四五年頃に、古河屋政兵衛《こがやせいべゑ》の甥《をひ》に当る、今の夫と結婚した。夫はその頃は横浜に、今は銀座の何丁目かに、小さい時計屋の店を出してゐた。……
お富はふと目を挙げた。その時丁度さしかかつた、二頭立ちの馬車の中には、新公が悠々と坐つてゐた。新公が、　尤《もつと》も今の新公の体は、駝鳥《だてう》の羽根の前立だの、巖《いか》めしい金モオルの飾緒だの、大小幾つかの勲章だの、いろいろの名誉の標章に埋まつてゐるやうなものだつた。しかし半白の髭の間に、こちらを見てゐる赭《あか》ら顔は、往年の乞食に違ひなかつた。お富は思はず足を緩《ゆる》めた。が、不思議にも驚かなかつた。新公は唯の乞食ではない。　そんな事はなぜかわかつてゐた。顔のせゐか、言葉のせゐか、それとも持つてゐた短銃のせゐか、兎に角わかつてはゐたのだつた。お富は眉も動かさずに、ぢつと新公の顔を眺めた。新公も故意か偶然か、彼女の顔を見守つてゐた。二十年以前の雨の日の記憶は、この瞬間お富の心に、切ない程はつきり浮んで来た。彼女はあの日無分別にも、一匹の猫を救ふ為に、新公に体を任さうとした。その動機は何だつたか、　彼女はそれを知らなかつた。新公は亦さう云ふ羽目にも、彼女が投げ出した体には、指さへ触れる事を肯《がへん》じなかつた。その動機は何だつたか、　それも彼女は知らなかつた。が、知らないのにも関わらず、それらは皆お富には、当然すぎる程当然だつた。彼女は馬車とすれ違ひながら、何か心の伸びるやうな気がした。
新公の馬車の通り過ぎた時、夫は人ごみの間から、又お富を振り返つた。彼女はやはりその顔を見ると、何事もないやうに頬笑んで見せた。活《い》き活きと、嬉しさうに。……
[# 地から 2 字上げ] (大正十一年八月)

底本：「現代日本文学大系43芥川龍之介集」筑摩書房
1968 (昭和43) 年8月25日初版第1刷発行

入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
1999年1月19日公開
2004年2月19日修正
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。